

授業評価項目の作成とその利用事例

服部 環

心理学系助教授

多数の大学がファカルティ・ディベロップメント（教授能力の開発）の一助として、学生による授業評価を実施しています。その一方、教官が独自の質問項目を用いて授業評価を実施しているケースもあります。そうした授業評価項目の一部は論文、書籍、ホームページ等を通して一般に公開されています。昨年、教育計画室では、そうした資料や他大学で利用されている授業評価項目を参考にして、講義科目の授業評価を行う質問項目を作成してみました。本稿では、質問項目の作成手続き、学生が授業評価を行う際の視点と授業の総合的評価との関係、そして、本学教官へ実施した授業評価の一事例を紹介します。

1. 調査表の作成

1.1 項目作成

海保・服部（1981）、片岡・喜多村（1989）、荻谷（1992）、藤田正一（1996）、大学セミ

ナー・ハウス（1999）、栃木（1999）、藤田哲也（2000,2001）、工学システム学類（2002）、国立・私立5大学の調査表などを参考にし、「学生の授業への取り組み・意欲、授業設計、わかりやすさ、授業の進度、教育機器、教官の熱意、教科書・参考書・配付資料、授業の効果、成績評価、授業の総合的な評価など」を問う58項目を作成しました。回答形式は「5-よく当てはまる、4-少し当てはまる、3-どちらでもない、2-少し当てはまらない、1-まったく当てはまらない」の5段階評定です。

1.2 調査の実施

ある主専攻で開講されている72科目と全学共通必修・選択科目として指定されている中から9科目を選び、授業評価対象科目としました。そして、各科目に学籍番号を対応させて回答者を指名しました。ただし、ここでは項目の整理・分類が目的です

から、科目名と回収した回答用紙とを対応づけないようにしました。有効回答者数は105名です。

2. 評価の視点と総合評価との関係

2.1 学生による評価の視点

因子分析と呼ばれる方法で項目の分類を試みました。5段階評定を求めた質問の回答は選択肢の番号をそのまま用いて1点から5点とし、質的な回答を求めた項目については、回答選択肢を適宜、得点化しました。以下に分類結果を紹介しますが、紙数を節約するために、各群を代表する数項目を示します。

(1) 学生自身に関する評価

「学習の意欲」と「学習の方向性」に関する項目がまとまりました。分類結果は表1の通りです。

表1 学生の自己評価尺度

[学習意欲]
授業に積極的に出席した
授業に意欲的に取り組んだ
授業の内容について予習や復習をした
[学習の方向性]
教科書以外でも、授業内容に関する書籍や資料を調べた
授業により、この科目に関する興味や関心が深まった
授業によって今後の学習活動の手がかりを得ることができた

(2) 授業に関する評価

学生による授業評価項目の分類結果を表

2に示します。各群内の典型的な項目内容を見ますと、学生は「体系的」、「知的刺激」、「授業参加」、「成績評価・提示技術」、「教材」などの視点から授業を評価している様子が推察できます。なお、「成績評価・提示技術」には成績評価と教育機器を問う、内容的に

表2 学生による授業評価尺度

[体型的]
授業内容は体系的でよくまとまっていた
授業内容を分かりやすくするための工夫がなされていた
教官の説明は論理的であった
配布・閲覧資料、ビデオ、黒板などの使い方が効果的であった
学生の理解度に応じて教えようとしていた
[知的刺激]
授業内容に知的な刺激を受けた
授業によって、知識を獲得できた
授業内容は他の授業でも役に立つと思われた
授業内容の水準には満足できた
重要なポイントがわかるように工夫されていた
[授業参加]
教官が学生の質問や疑問に適切に対応していた
受講生が質問したり、意見を言えるように配慮していた
教官が学生の発言・授業への参加を促していた
教官が学生に質問していた
[提示技術]
教官の声の大きさ・話し方は聞き取りやすかった
黒板、スライド、OHPなどで提示された文字の大きさは適切であった
成績評価の方法・基準には納得しましたか
成績評価は公平かつ正確だと思う
[教材]
授業の進み方は適切でしたか
指定された教科書の難易度は適切でしたか
テスト・レポートの内容は授業内容を適切に反映していた

やや異質な項目が混在しますが、欠損値処理に起因するアーチファクトの可能性があるので、さらに検討する必要があります。

2.2 「総合的評価」と「推薦度」の予測

「総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思う」によって授業の「総合的評価」、また、必須科目もあるのでやや微妙な質問ですが、「この授業を友人にも薦めたい」によって「推薦度」を問いました。そして、授業の総合的な評価や友人への推薦度を決める要因を探るために、「学習意欲、学習の方向性、体系的性、知的刺激、授業参加」という評価の視点と受講理由（必須科目のとき0点、選択科目のとき1点）を説明変数として、「総合的評価と推薦度」の得点を多変量回帰予測してみました。その結果を図1に示します。

図中の矢印が仮定した因果の方向、脇の数値が標準化パス係数（標準化偏回帰係数）です。数値が大きいパス係数ほど、矢印を出している評価の視点が総合的評価と推薦度の得点を説明しやすいことを示唆します。

「総合的評価」に対するパス係数では、「知的刺激」が0.58と大きいので、授業内容から知的な刺激を受け、説明がわかりやすく、しかも他の授業でも役に立つと評価される授業が総合的にも高く評価される傾

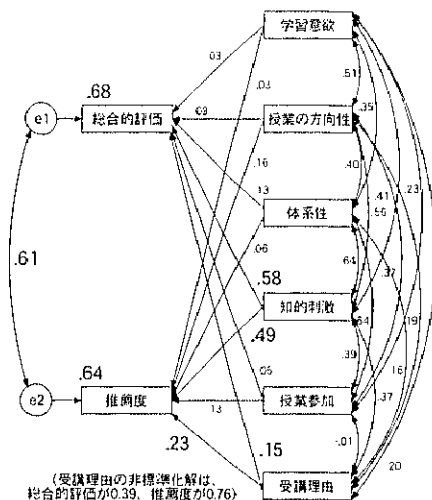


図1 総合的評価と推薦度の多変量回帰予測

向にあるようです。また、「推薦度」に対しても「知的刺激」のパス係数が0.49と大きいので、「知的刺激」を受けた授業ほど、友人に推薦されやすいと言えます。

一方、「受講理由」も総合的な評価に対して有意なパス係数を示しました。つまり、必修科目は「学習意欲、学習の方向性、体系的性、知的刺激、授業参加」などの評価が選択科目と等しくても、必修科目というだけで、選択科目よりも0.39点ほど総合的に低い評価を受ける可能性が高い、ということです。

なお、パス係数が0に近い「学習意欲」、「学習の方向性」、「体系的性」、「授業参加」の評価と「総合的評価」および「推薦度」の評価が無関係であることを意味するものではありません。

ません。実際、「学習意欲」、「学習の方向性」、「体系性」、「授業参加」は「総合的評価」および「推薦度」と0.3から0.6の相関があります。

3. 授業評価の個別事例

本学教官1名の協力を得て、ある主専攻の2年次生が受講する必修科目の授業評価を行ってみました。ここでは、他の必須科目との相違が大きい回答を表3に紹介します。

回答の平均値を見ますと、この授業は受講生が質問したり、意見を言えるように配慮し、質問・疑問に適切に対応していたと評価され、教官の授業への取り組みも熱心であり、授業の開始・終了時間を守っていたと認識されています。しかし、このように授業に熱心であると評価されていますが、

受講生が授業内容・配布資料等を十分に理解するまでには至っていないようです。また、他の授業に比べて、学生の理解度に応じて教えようとしてないと厳しく評価されています。

授業評価の結果を協力教官に返却したところ、概ね納得できるとの回答を得ました。ただ、抽象的な概念や理論の説明がわかりにくいと評価されていますが、授業内容の性格上、やむを得ない点もあるのではないかと回答を得ました。教官としては分かりやすいように具体例をなるべく提示した上で、抽象的概念と理論を教授するように努力しているとのことでした。

また、この授業は受講生の予習と復習を欠かせないようですが、それが不十分なのではないかと指摘されました。実際、「授業の内容について予習や復習をした」の平

表3 必修科目と評価点と平均差の大きい項目

項 目	平均差*	本事例の平均
・評価が高い項目		
34 教官は授業の取り組みが熱心であった	0.4	4.2
20 授業の開始・終了時間は守られていた	0.4	4.1
36 受講生が質問したり、意見を言えるように配慮していた	0.6	3.4
30 黒板、スライド、OHPなどで提示された文字の大きさは適切であった	0.6	4.0
35 教官が学生の質問や疑問に適切に対応していた	0.8	3.6
・評価が低い項目		
45 授業の内容は十分に理解できた	-0.8	2.8
18 抽象的な概念や理論の説明はわかりやすかった	-0.7	2.3
17 授業内容を分かりやすくするための工夫がなされていた	-0.6	2.7
46 教科書・配布資料は十分に理解できた	-0.5	2.9
33 学生の理解度に応じて教えようとしていた	-0.4	2.3

* 本事例の平均値-必修科目の平均値

均値は、他の必修科目よりも-0.4点ほど小さく、受講生の学習意欲もやや物足りないように思われます。学生の学習意欲の向上も望まれると言えましょう。

の事例を参考として— ファカルティ・ディベロップメント実施への提言 筑波大学教育計画室、13-32.

(はっとり たまき/教育心理学)

4. 文献

大学セミナー・ハウス 1999 大学力を創る—FDハンドブック 東信堂

藤田正一 1996 北海道大学における学生による授業評価 筑波フォーラム、45、28-34.

藤田哲也 2000 学生の受講態度の自己評価と授業評価との関係について 光華女子大学研究紀要、38、249-268.

藤田哲也 2001 大学の心理学講義における授業改革の試み—学生による授業評価を用いた検証— 光華女子大学研究紀要、39、143-168.

海保博之・服部 環 1981 大学における授業の学生による評価 IDE 現代の高等教育、224、39-45.

片岡徳雄・喜多村和之編 1989 大学授業の研究 玉川大学出版部

荻谷剛彦 1992 アメリカの大学・ニッポンの大学 玉川大学出版部

工学システム学類 2002 授業評価調査用紙 筑波大学

栃木紀郎 1999 授業改革のための学生による授業評価—米国における授業評価